

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520123

研究課題名(和文)『楽家録』の書誌と礼楽思想との関連性に関する総合的研究

研究課題名(英文) A study of the bibliography of Gakkaroku and the relation with the thoughts on manner and music

研究代表者

武内 恵美子 (TAKENOUCHI, EMIKO)

京都市立芸術大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：30400518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は元禄3(1690)年成立の『楽家録』の書誌について、現存する写本からその傾向を解明すること、楽思想と雅楽演奏との関係性について探求することを目指した。

『楽家録』の写本を複写・撮影後デジタルデータ化し比較検討した結果、調査した全ての写本中筆跡が一致するものは皆無であった。このことから『楽家録』の写本は業者・商売上の作成である可能性が低く、かつ奥書がほぼ皆無であることから、興味関心を満たすための私的な写本である可能性も低いことがわかった。また、雅楽実践を伴う楽思想の場における『楽家録』の所有は希有であり、楽思想の実践的テキストとして用いられた可能性もまた低いことが判明した。

研究成果の概要(英文)：This is a study to clarify a tendency of bibliography of Gakkaroku and to seek the relationship of music thought and the performance of Gagaku. After I took pictures manuscript books of Gakkaroku and converted into digital data, I draw these data each other. So it made clear that all of books were not the same. From the result, manuscript books of Gakkaroku didn't make for sales. And these didn't have note of the end page of these books, so these didn't make for some personal interests. On the other side, they didn't have Gakkaroku at the play Gagaku for the practice of music thought. So these didn't use for practice of the music thought.

研究分野：音楽学

キーワード：楽思想 雅楽 楽家録

1. 研究開始当初の背景

江戸時代に成立した雅楽の理論書(楽書)のうち、質量ともに最も優れ、後世に多大な影響を与えたと評価されている阿部季尚著『楽家録』(元禄3年成立)は、雅楽研究の基本的文献として現在でも活用され、雅楽の三大楽書に挙げられるにもかかわらず、その書誌的研究はほとんどなされてこなかった。また『楽家録』と楽思想の相互関係についてもほとんど言及されてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、阿部季尚著『楽家録』(元禄3年成立)を、

書誌研究によって『楽家録』の資料的価値とその影響を解明すること、

『楽家録』を通して雅楽が近世文化に与えた影響、特に儒学における礼楽思想への影響および相関関係、ならびに国学における古学探究への影響および相関関係を中心に研究すること

によって、江戸時代の雅楽知識レベルとその共有、ならびに近世文化における雅楽の存在意義の新たな方向性を研究することを目的とした。

3. 研究の方法

『楽家録』の書誌研究

『楽家録』の写本の代表的なものを調査・複写(マイクロ撮影・紙焼き・コピー・写真撮影等)し、その比較によって、伝本の異同や特長を研究する。

資料の複写: 所蔵調査で必要と判断した資料については複写を行う。ただし予算の関係上調査した資料すべてを複写することはできないので、先に複写したものを基に、あらかじめ異動が認められるもの、あるいは重要な書き込み等があるものについて、可能な限り複写を行い、書誌研究の材料を収集する。

次に資料のファイリング・デジタルデータ化を進める。紙焼きやマイクロフィルム等、アナログデータについてはデジタルデータ化し、デジタルカメラで撮影したデータも含めて、使用に耐えうる状態に加工する。具体的にはJPG化し、画像の大きさ、解像度、読み取りにくい箇所の改善等、書誌研究の下準備を行う。またデジタル化したデータのファイリングも併せて行う。

書誌研究: デジタルデータ化した資料を基にして、画像編集ソフト等を使用して書誌研究を進める。主に筆耕の同定作業および流本の種類の確定を行い、どのように伝本が作られたのかを解明する。

礼楽思想と『楽家録』との関連性に関する研究

江戸期には礼楽思想の楽をどのような音

楽であるかが検討されていたが、それに関する研究は近年までほとんどなされてこなかった。また雅楽および『楽家録』との関係を解明する研究は皆無に等しい状況であった。本研究は江戸時代の儒学者が楽思想で想定する楽を雅楽と定めた経緯、及びその後の思想的展開を研究する。また楽思想の体現としての楽実践において雅楽の奏楽がどのようになされていたのか、特に藩校という場での楽実践について研究し、またその楽実践に『楽家録』がどのように関係したのかについて研究を進める。

4. 研究成果

『楽家録』の書誌研究

『楽家録』の書誌研究については、宮内庁書陵部、国会図書館、国立公文書館内閣文庫、京都府立総合資料館、もりおか歴史文化館、秋田県立図書館の各館所蔵の『楽家録』を複写し、紙焼き、マイクロフィルムのものについてはデジタルデータ化した。それらについてはデジタルデータ同士を比較した。比較のポイントは、

1. 本の体裁(実寸および表紙の題簽、ページ数等) 2. 本の基本的書誌情報(1ページの行数、前書き、奥付等) 3. 筆跡 4. 図の異同 5. 書き込みの有無 6. 奥付等への筆写本人に関する情報とした。

デジタルデータ化した6館11種を比較した上で、複写を行っていない他館所蔵の『楽家録』と上記1から6について比較研究した。

その結果、1. 本の体裁については、基本的に同じであった。ただし大きさはほぼ一定だが、合本等がなされているものが多く、表紙の題簽は異なっている場合が多いが、後から付けられたものと考えられるため、問題とはしなかった。

2. 基本的書誌情報については、基本的には同じ物が多いが、全冊揃いではなく部分的あるいは1冊のみの写本の場合は、元の体裁を無視した形で筆耕されている場合があることを確認した。(例: 国立公文書館内閣文庫蔵、21716、『楽家録校章』)

3. 筆跡については、調査したすべての写本については一致するものは1点も存在しなかった。

4. 図の異同に関しては、全てがほぼ同じ図を掲載していたが、3で述べたようにすべての筆跡が異なるので、図に関しても写すことによる異同は見られた。その他、明らかに異なる傾向も見いだせた。

5. 書き込みについては、当然ではあるが、その有無は本に寄って異なっていた。誤写の指摘の他、使用された本には書き込みがあるように見受けられた。

6. 奥付等への筆写本人の情報については、

調査した伝本のうち、京都府立総合資料館蔵書本および宮内庁書陵部蔵書本以外は記載がなかった。上記2点については以前から知られているため、特にそれに関する考察は行っていない。

以上の結果から、『楽家録』の写本については次の通りに分析することができた。

『楽家録』は50巻という大著であり、刊行されていない書物であるが、写本は明らかな筆耕の同一は見られず、少なくとも調査したすべての伝本は別の人物によって筆写されたことがわかった。おそらくそれぞれが個別に作成された、すなわち商売としての写本ではなく個人としての写本であると考えられるが、それを示す奥付の書き込みはほぼ見られなかった。それが何を意味するのかは今後の課題とした。

一方、図の異同、特に記載された文字の異同から、少なくとも写本が大きく2系統存在することが判明した。(細かい異同は他にも存在する)底本となった本が2種類あったということを指すが、実際にどの本が底本であったかの同定はできていない。またなぜ2系統が生じたのか、なぜ2系統に集約されたのかについても、写本のみでは解明が難しいため、今後の課題とした。

いずれにしろ、『楽家録』の写本は、いずれかの本屋によって商業的に筆写されたものではなく、基本的に個人がそれぞれ写本したものである可能性が高いこと、その写本には大きく2系統が存在し、それを辿ることによって、場合によっては人的影響等までを解明することができる可能性も捨てきれないと考えられる。

礼楽思想と『楽家録』との関連性に関する研究

近世日本において礼楽思想における楽がいわゆる日本の伝統音楽である「雅楽」を指しているということは、漠然とした認識はあるものの、何故どのようにそう定まったのかについてはほとんど言及されてこなかった。本研究ではまずその始祖となった熊沢蕃山に焦点を当て研究を行った。

熊沢蕃山は『楽家録』の著者である安倍季尚とほぼ同時期の人物であり、一時期京都で活躍し、公家とも交流があった人物である。熊沢蕃山が楽思想におけるいわゆる雅楽(雅正の楽)を雅楽と定めたが、その手法と意図を彼の著作である「雅楽解」から読み解く試みを行った。(拙稿「熊沢蕃山の楽思想と18世紀への影響」)また安倍季尚と時期・場所ともに同じ地に居住した経験があり、接点があったことをその伝承から伺えた。ただしそれ以上の直接的な交流については未詳で、今後の課題とした。

楽の実践としての雅楽教習については、上級藩士の教育機関である藩校での雅楽教習の実態について検討した。特に弘前藩は藩校において積極的に雅楽教習を行っていた記録があり、弘前藩の資料を再検討することで、楽実践のあり方について探求した。(拙稿「史料紹介『奏楽御用留』(弘前図書館岩見文庫蔵)」、「藩校における楽の実践 弘前藩校を例として」)

その結果、弘前藩校稽古館では荻生徂徠(1666-1728)の門下である宇佐美瀧水(1710-1766)の系統の学問を行い、その結果雅楽教習を行っていたのではないかとの解釈に至った。またその奏楽実践は寛政8年(1796)藩校設立時から幕末の慶応2年(1866)まで継続されていたことも特筆すべき点であることを指摘し、弘前図書館に所蔵されている楽譜も含めた史料を分析することでその実態を研究した。それによって雅楽のみならず琴(七絃琴)や明清楽系の音楽も実践されていたことがわかった。ただし、弘前藩校の蔵書目録には『楽家録』の記録はなく、また弘前図書館等にもその蔵書はなかった。このことから、藩校における楽実践と『楽家録』の所有には関係性が見られないことが判明した。すなわち、雅楽の演奏実践に『楽家録』の所持は必ずしも必要ないとの解釈も可能になることから、楽実践と『楽家録』の関係性、および『楽家録』の所有の理由については今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

武内恵美子 「史料紹介『奏楽御用留』(弘前図書館岩見文庫蔵)」『弘前大学国史研究会』第131号、pp76-82 平成23年11月30日 査読有

[学会発表](計5件)

武内恵美子 「「楽」思想の歴史的展開都北東北における需要」平成22年9月11日 於：弘前大学国史研究会 (青森県弘前市)

武内恵美子 「18世紀における楽思想の展開」平成23年2月5日 於：国際日本文化研究センター共同研究会 (京都府京都市)

武内恵美子 「積奠と楽」平成24年4月28日 於：国際日本文化研究センター共同研究会 (京都府京都市)

武内恵美子 「藩校における楽の実施と『楽家録』」平成25年2月15日 於：国際日本文化研究センター共同研究会 (京都府京都)

市)

武内恵美子、遠藤徹、榎木亨、山寺美紀子「近世中期の儒学と楽思想」(パネルディスカッション、武内はチェアパーソン) 東洋音楽学会第 65 回大会 平成 26 年 11 月 23 日 於：四天王寺大学 (大阪府羽曳野市)

〔図書〕(計 2 件)

武内恵美子 「熊沢蕃山の楽思想と 18 世紀への影響」 笠谷和比古編『18 世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版、平成 23 年 8 月 pp.117-146

武内恵美子「藩校における楽の実践 弘前藩校を例として」 笠谷和比古編『徳川社会の日本の近代化』思文閣出版、平成 27 年 3 月 pp.301-334

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武内恵美子 (TAKENOUCHI, Emiko)
京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 准教授
研究者番号：30400518

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：